**『意図せざる宗教改革 The Unintended Reformation』著者自身のReview**

[**The Page 99 Test: Brad S. Gregory's "The Unintended Reformation"**](http___page99test.blogspot.pdf)**の和訳**

2011.12.14　Brad S. Gregory

和訳　20131017　rev.1　齋藤旬



『本の99頁を開きなさい。そうすればその全容の質が明らかになります。』　Ford Madox Ford (1873-1939 a novelist)

[Brad S. Gregory](http://history.nd.edu/faculty/directory/brad-s-gregory/)は、Notre Dame大学の歴史学助教授。彼が、彼の近著[『意図せざる宗教改革：如何に宗教改革は社会を世俗化したか』](http://heppas.blogspot.com/2011/11/unintended-reformation.html%22%20%5Ct%20%22_blank)に、この[Page 99 Test](http://page99test.blogspot.com/)をapplyしてくれた。以下、彼からの結果の報告。

----------------------

私（Gregory）の本『意図せざる宗教改革：如何に宗教改革は社会を世俗化したか』の内容を簡単に述べますと：

21世紀初期の北米と欧州のlifeは、西欧における宗教改革時代の未合意のdoctrine論争と政教相反（religio-political conflicts）が長期にわたって影響を及ぼし形成した生成物である。その複雑な生成過程について論考を加えてみよう。

･･･というものです。実は、私の本の全容をPage 99としてまとめるのは困難です。というのは、この本は広い範囲、例えばpublicな政治権力から高等教育の性質までを扱っているからです。この本の6つの章はそれぞれ、中世後期から現代まで各テーマの分析的物語を述べています。中世後期のChristianityが持つ制度化（institutionalize）された世界観が、宗教改革によってどの様にreshapeされたのか。色々な意味を持つ宗教改革が、このreshapeに関しどの様な役割を担ったのか。各章それぞれ、これに重点を置きました。ですのでPage 99としては、この本のkey argumentsの一つを取り上げそのsenseを伝えるものとしたいと思います。即ち、「人々が何を信ずるべきか、どう生きるべきか、何を大切にすべきか、これらについて、様々なtruth claimsが競合し合い相反しあう世界に、現在の私達は住んでいます。」「この状態が持続的に始まったのは1520年代のドイツが最初です。」「この様なdisagreementをmanageしようとして生まれたのが、西洋近代の統治制度と主要イデオロギーです。」の三つを伝えたいと思います。またPage 99は第2章「doctrineの相対化」についても触れるものになるでしょう。第2章で私は、the unsuccessful appeals to the inspiration of the Holy Spiritについてdiscussしています。the inspiration of the Holy Spiritとは何か。それは、Roman Catholic Churchのauthorityをrejectする者達が、聖書のmeaningに関するdisagreementsを克服するためにappealするものです。このappealは、16世紀に始まり現在もずっと続いています。この背景にあるのは、聖書の正しい解釈を求めようとすると必ず陥る膠着状態です。この膠着状態を解消する代わりにこの様なappealが論争のたびに全サイドからなされるのですから、それは「不毛な議論」そのものです。また、もしgenuine inspiration by the Spiritがあったとしても、やはり同様な膠着が起きます。behavioral criteria（行動基準）に依拠する方法をもってしても、この膠着を解決するのは不可能です。それは、このbehavioral criteriaに関して宗教改革時代のChristian達がした論争からもお分かりでしょう。以上まとめますと、私の本のPage 99は：

----------------------------

“external Word” --- 聖書に実際に引用され重み付けがなされ、従って比較とdebateが十分されたtext --- に関する聖書解釈学上のdisagreementと異なり、「誰の“心”にSpiritは“天からの教えを伝えた”か」に関するdisagreementは、克服できないほど問題が大きい。なぜなら、誰も他者の心の内面にアクセスできないからだ。これに関しては、宗教改革が始まってから現在の21世紀初期に至るまで、何も変化はない。今日、何百もあるPentecostal教派がこの問題を克服できないでいることからも、何も変化ないのは明らかだ。Pentecostal教派各派は、the work of the Spirit（聖霊の御業）について相反する主張を幾つも出している。例えば、TrinitarianとOnenessの間にある教派分派による末日伝説（the latter-day legacy）や、1910年代のPentecostal教派である“First Work” や“Second Work”などがそういった相反する主張だ。古代ギリシャのErasumu’sの質問：「私は一体どうしたら良いのだろうか？沢山の人々が異なる解釈の正当性を主張し、皆それぞれがthe Spiritによるものと誓約するときに。」の持つ妥当性は、1524年も今日も少しも変わっていない。特に、パウロの言う「ニセ使徒」 ---しかし、驚くには及ばない。サタンも光の天使に擬装するのだから。(2 Cor 11:14) --- の様に外見と中味にハッとするほどのcontrastを帯びているならば、難問であり続ける。ただ確かに、中身と外見が正反対という人はいるかもしれない。つまり、Holy Spiritにinspireされupright livesをleadした敬虔なChristians、の様に見える16世紀の人々の中には、実際は全くの不実 --- Holy Spiritにinspireされた様に見せかけて敬虔さを装った --- 人もいたことだろう。Guy de Brèsの様な再洗礼派（Anabaptist）を批判したReformed Protestantは、holy lifeの外見と中身にはシャープな違いがあるとし、Anabaptistが自らのbeliefsのために静寂な死をも厭わないのは見せかけだとした。最近では、先述したパウロの警告は、Jesusのややstraightforwardかと思える「ニセ預言者とホンモノ預言者を見分ける基準」、敷衍すれば、「Spiritによってenlightenedされた人とそうでない人とを見分ける基準」、即ち、“You will know them by their fruits” (Mt 7:16, 20)：（あなたがたは、その実によって彼らを見わけるであろう。）、この基準の使用注意点を挙げたものとされている。

いや、Jesusの格言はstraightforwardではなかったのかもしれない。つまり、behavioral criteria：“by their fruits ye shall know them”については全ての人が従うとしても、宗教改革の発生から明らかとなったdisagreementsは、このcriterionの中味についての合意形成を不可能なものとしてしまったのだ。Christiansは、何を信ずるべきか何を行うべきか、について合意を形成していないので、何がthe fruits of a Christian lifeなのかについて合意を形成していないのだ。例えば、ドイツ農民戦争（1524年）の後 --- ただし、トーマス・ミュンツァーの反乱を除いて ---、Anabaptistは政治参加をしなくなったが、これは、罪深き現世をholyに拒否したことになるのか、それとも、public lifeへの参加義務を怠る罪深きことなのか？　あるいは、16世紀中葉のアーミッシュの生活、Hutterite communitarian lifeは、Christianとしてのthe fruit、西暦1世紀のChristianが実践しActs 2:4（聖霊降臨の日）に記述のあるthe community of goodsなのか、それとも、核家族達の常軌を逸した変形であり、最小単位のChristian societyを形成する私有財産と世帯の集合なのか？　あるいは、カルバン派の人達は、彼等がunderstandする福音に従って政治的社会的制度を形成することで、Spiritのfruitsを明らかにしようとしているのか、それとも、faith単独でのjustificationに後戻りし、the “two kingdoms”（福音の世界と現世的世界）の本来の区別を逸脱したものなのか？　この様な問題は、ほとんど無尽蔵にわき上がってくる。

----------------------------

というものになります。

inspiration by the Spiritにappealするのと同様に、reason（理性）にappealするのも、解釈紛争（interpretative conflicts）を解決することは出来ません。なぜなら、それはcharacter, application, and scopeにおける意見の不一致だからです。近代的自由国家は、キリスト教がもつ現世破壊のこの様な問題を、善に関する代替的倫理観を置換導入することで解決しました。権利に関する形式的倫理を導入し、個々人に、自分達で「善」の定義をする自由、また、信仰礼拝をする（または、しない）自由をあたえました。それら自由の代償は、国家への政治的従属を受け入れることでした。この様にして、近代の基礎が築かれ、競合するモラルと和解できない政治観（competing moral commitments and irreconcilable political views）から成る現代の多文化主義が形成されたのでした。

詳細は、Harvard University Press websiteの
<http://www.hup.harvard.edu/catalog.php?isbn=9780674045637>　を参照してください。